

戦後80周年の中の松村謙三と中国

―“草の根”で受け継がれる「松村精神」の輝き

拓殖大学国際学部教授 岡田 実（会員・顧問）



はじめに

筆者は、前職で中国との国際協力の仕事に従事してきた。その現場では多くの専門家や青年海外協力隊員が、直接交流を通じて相互理解を深めていたが、筆者は、そうした活動ができる根底には、両国の先人の知恵と血の滲むような努力があったことを肝に銘じてきた。

1972年の国交正常化前にその「井戸を掘った人」が置かれた環境は、まさに四面楚歌であった。松村謙三

は、その代表的存在にほかならない。松村は、1950年代末に日中関係が断絶状態になった状況を憂え、1959年を皮切りに5回の訪中を行い、周恩来総理らとの徹底的な対話を通じて、厚い信頼関係を築いた。こうして「総連絡人」として日中の細い糸をつなぐ貴重な役割を担った松村であったが、右翼や党内のタカ派からは「国賊」との罵声を浴び、時には生命の危険すら感じさせる場面もあったという。

翻って、昨今の厳しい米中対立、反グローバリズムの荒波は、この日本に

まで押し寄せてきている。筆者には昨今の諸情勢が、松村が日中国交正常化に命がけで取り組んだ時代と重なって見える。とすれば、行き詰まりを見せる日中関係の打開のヒントが松村の中に隠されているのではないか。本稿は、かかる視点から松村に着目し、特に松村亡き後、「松村精神」がいかに地元に根付き、継承され、その後現在に至る「草の根」日中交流に発展・継続していったのかに光を当てるものである。

なお、筆者は松村と同じ富山県出身であるが、学生時代に直接松村のこと

を教わった記憶がない。その後自分なりに日中関係史を学ぶ中で、松村の功績を書物や映像（松村の葬儀も、日中国交正常化に至る過程で一つの重要な場となっている）の中で知ることになるが、松村という政治家を深く考えるきっかけをいただいたのは、国際善隣協会が講師として招かれた北京大学・初曉波教授からであった。初教授は松村の郷里まで何度も足を運び、ご家族とも交流され、膨大な資料を収集されていた。改めて、国際善隣協会と初教授に感謝申し上げたい。

1. 「松村精神」を育んだ風土・環境―富山県福光町・大隈重信・中国

松村の政治姿勢や思想は「松村精神」と呼ばれることがある。筆者は戦前から戦後を貫く三つの特徴を挙げることができると考える。

第一にアジア主義である。「アジア民族と手を取り、その繁栄と生活向上に最善の努力をし、アジア人の生活お

よび感情を自由国家群の中に溶け合わせる努力をしてアジアの平和に寄与するのが日本の使命である」と松村は主張する。

第二に政治制度の違いを超えた相互尊重と平和共存である。この姿勢は、昨今のいわゆる「価値観外交」とは相容れない。

第三に清廉な政治である。松村と周恩来が肝胆相照らす関係を深めていたのは、松村が中国の社会と文化に深い造詣を持つ稀有な存在であっただけでなく、清廉という人間として基本的な資質をお互いに見出したからというのが筆者の見立てである。

では、こうした「松村精神」を育んだ風土・環境はどのようなものであったのか。松村は富山県西部、石川県境に近い福光町（現南砺市、以下「福光」）に生まれた。福光は、「散居村」で有名な砺波平野の一角に位置し、のどかな田園風景が広がる農村地帯にある。一見、中国と何の関わりもないように思えるが、実は福光は金沢と古来からの交流があり、距離も近かったた

め、金沢を訪れた学者、詩人、画家、俳人、茶人などの文化人の中に福光を訪れたものも多々あったという。その中に中国の文人も含まれ、「福光では漢文の書物ぐらゐは一般庶民でも読む」とまで言われた環境にあった。松村は書道にも優れ、多くの揮毫を残しており、松村記念会館は遺墨集の制作や遺墨展にも取り組んでいる。

こうした文化的風土にあった福光であるが、一方、政治的にも自由民権運動がこの地まで波及し、活発な環境にあった。砺波地方で結成された越中改進黨は、中央の立憲改進黨に合流する動きを見せるなど、福光を中心とした砺波地方は、立憲改進黨の強力な地盤となっていた。松村は、文化的には漢文学が普及し、政治的には自由民権運動が活発な風土の中で育ったのである。

松村は、高岡中学校卒業後、立憲改進黨を創設した大隈重信が設立した早稲田大学に進学し、大隈から直接の薫陶を受ける機会を得る。また大学では中国語を学び、後に袁世凱の顧問も務

めることになる青柳篤恒講師に引率され、学友5名と初めての中国視察旅行を経験する。旅行中、武昌では洋務運動の中心人物の一人であった、張之洞を訪問するなど（結局多忙につき青柳のみ直接面会）、清朝末期の激動の中国を直接見聞する貴重な機会を得ている。さらに2回目の訪中となった、民

政党・済南事件視察団に加わった際、奉天駅付近で張作霖爆殺事件に遭遇し現場を視察している。当時の軍部の引き起こしたこの生々しい事件を現場近くで実体験したことは、その後の松村に影響を与えたことは想像に難くない。

松村はその後終戦まで、翼賛政治会総務、政務調査会長、大日本政治会幹事長などの要職を務める。終戦後の占領下では、東久邇宮稔彦王内閣の厚生大臣、幣原喜重郎内閣の農林大臣に就任し、農地制度改革に取り組み、農地改革案を衆議院に提出するなど、農地改革において辣腕を振るうが、GHQから公職追放の指定を受ける。約5年間の雌伏を経て公職追放解除後、改進黨

党を結成、幹事長を務めた後、第2次鳩山内閣の文部大臣に就任するが、その際に来日中の郭沫若から訪中を勧められたことが、日中関係に深く入り込むきっかけとなった。その後の松村の日中関係改善に向けた精力的な活動については次頁の年譜の通りである。

2. 「松村精神」を継承した「草の根」 日中交流の発展過程

筆者は、南砺市の松村記念会館を訪ね、中国との交流に実際に携わってこられた関係者からお話をうかがい、またさまざまな資料を提供いただいた。それらに基づき、松村の遺志を受け継ぎ、福光が中国とどのような関係を結んできたかを、以下一瞥してみたい。

（1）福光―紹興の友好市町の締結

改革開放開始直後の1979年5月、全国人民代表大会常務委員会副委員長で中日友好協会会長の廖承志（周恩来総理の側近）を団長に、「中日友好の船」で600名の親善使節団が日

本を訪問したが、廖は150名の団員とともに、日中国交正常化の「井戸を掘った人」である松村の故郷・福光を訪れている。このとき福光は、廖の故郷、広東省恵州市との姉妹関係締結を申し入れたという。しかし、松村を高く評価する廖は、周恩来の故郷、浙江省紹興市こそふさわしいと提案したのをきっかけに、紹興市との友好市町締結の話が進んだ。1983年3月、福光と紹興市の友好市町締結調印式が、紹興市魯迅記念館で行われた。紹興市は魯迅の故郷でもある。ちなみに魯迅の恩師であり中国の教科書にも登場する藤野厳九郎先生は、福井県あわら市出身であり、紹興市はあわら市とも友好都市を締結している。

（2）「草の根」交流の発展と継続

その後の福光と紹興市との交流の特徴は、「草の根」交流に尽きる。現在まで14回の訪中団を派遣している「南砺市福紹会」の前身は、福光自治振興会である。1987年に福光公民館が新築オープンする記念に、紹興市

松村謙三年譜（主に中国関連）

年	年齢	主な出来事
1883	0	石川県砺波郡福光町（現富山県南砺市福光町）に生まれる
1902	19	東京専門学校（その年早稲田大学と改称）入学。大隈重信邸で、大隈重信、高田早苗に会う
1904	21	青柳篤恒講師に引率され、学友5名と中国視察。南京、漢口、武昌（張之洞を訪問）、上海（領事館、東亜同文書院、南洋公学（現上海交通大学）などを訪問
1906	23	早稲田大学政治経済学科卒業。卒業論文「日本農業恐慌論」。高田早苗の推薦で報知新聞社入社
1912	29	父逝去に伴い、報知新聞社を辞し、福光に帰り、薬種商を継ぐ
1917	34	福光町会議員当選
1919	36	富山県会議員当選
1923	40	永井柳太郎らと青島、華北旅行。富山県会議員落選
1925	42	福光町会議員再選
1928	45	民政党から立候補し、衆議院議員に初当選。民政党・済南事件視察団に加わり中国へ。奉天駅付近で張作霖事件に遭遇し、現場を視察。帰国後、浜口雄幸総裁に報告。その後、当選を重ねる
1942	59	満州国建国10周年祝典に衆議院代表として参加
1943	60	満州国派遣国会使節団長として食糧増産交渉
1944	61	翼賛政治会総務、政務調査会長に就任
1945	62	大日本政治会幹事長に就任。終戦後の占領下で東久邇宮稔彦王内閣の厚生大臣就任。幣原喜重郎内閣の農林大臣就任。農地制度改革に取り組み、農地改革案を衆議院に提出
1946	63	公職追放の指定を受ける（その前に農相を辞任）
1951	68	公職追放解除（鳩山一郎らと共に）。旧民政党同志と新政クラブ結成
1952	69	改進黨を結成、中央常任委員会議長に就任
1953	70	改進黨幹事長に就任
1955	72	第2次鳩山内閣の文部大臣に就任。来日中の郭沫若から訪中を勧められる
1957	74	首相特使として中近東、東南アジアを歴訪。来日中の廖承志と会見
1959	76	自民党総裁公選に立候補。岸信介に敗れる。周恩来の招待で第1次訪中（約1か月半）
1960	77	新安保条約の自民党単独採決に反対し、石橋湛山、河野一郎らと欠席。池田勇人首相に日中問題打開を要望
1962	79	第2次訪中（約2週間）。積み上げ方式による日中関係正常化で合意
1964	81	第3次訪中（約1か月）。廖承志と新聞記者交換、LT貿易連絡事務所設置で合意、調印
1965	82	自民党外交調査会顧問に就任。自民党顧問に就任
1966	83	自民党「アジア・アフリカ問題研究会」世話人に就任。第4次訪中（5日間）
1970	87	第5次訪中（約1か月）。郭沫若、周恩来と会談
1971	88	病床にてニクソン訪中のニュースを聞く。8月21日逝去。築地本願寺において「故松村謙三先生を偲ぶ会」、葬儀が行われる。王国権・中日友好協会副会長が葬儀参列のため来日。松村謙三顕彰会の拠金により福光町に建設中の「松村記念会館」が完成し、完成式、胸像除幕式
1972		日中国交正常化

出所：『山高水長—松村謙三と中国』を基に筆者作成

から四季を描いた水墨画や白磁の花瓶が贈られたことをきっかけに、福光自治振興会がそのお礼を伝えるに紹興市を訪問。それがその後の相互訪問につながって現在に至っている。

また、「南砺市日中友好教育会」の活動も特徴的だ。友好市町締結の翌年、1984年に、当時の町教育長を団長とした第1次中学生中国友好訪問団派遣を嚆矢とし、今日まで29回もの派遣が継続している（紹興市側からも訪日）。2008年3月には南砺市立福光中学校と紹興市文瀾中学とが姉妹校締結しており、コロナ禍によって相互訪問が困難となった時期には、オンラインでの交流を行っていた。

さらに、議員を中心とした交流活動も長い歴史を有している。「松村謙三顕彰会」（県選出国會議員、県議、市議、町議などを中心に構成）が中国への友好訪問団をこれまで42回派遣しており、中日友好協会や北京大学訪問、紹興市や、富山県と姉妹関係にある遼寧省を含む中国各地の視察を実施してきた。

（3）ユニークな漫画本 「松村謙三」と紙芝居 「けんそはん」

松村記念会館が実施している事業で特筆すべきユニークな事業が漫画本と紙芝居による普及活動である。松村を直接知る町民の高齢化に伴い、

「松村精神」をいかに次の世代に受け継ぐかが大きな課題となっている。

この課題への「切り札」とも言えるのが、漫画本、紙芝居などの教材制作、YouTubeなどを活用した普及である。かつて治水に苦しんだ砺波平野に刀利ダムを建設するなど、インフラ建設による公共の福祉や郷土の発展を実現させ、「日本は平和な環境の中でアジアの繁栄とともに生存すべきである」としてアジア、中国との関係を重視した「松村精神」の遺志を継承することを目的に制作され



マンガふるさとの偉人『郷土の政治家 松村謙三』南砺市教育委員会・松村記念会館、2024年9月（中国語版）。



森みちこ『松村謙三紙芝居「けんそはんと中国のはなし」』松村記念会館、2024年3月。

たこれらの教材は、小中学校の「総合学習」などの授業ですでに使用され始めている。さらに、中国語に翻訳された漫画本は、交流のため県内を訪れる中国の大学生にも配付され、今後、中国を訪問する団体も持参する計画があるという。

3. 「井戸を掘った人」の郷里と日中交流の現状

では、松村と同じように中国側から「井戸を掘った人」と目される人物の郷里では、その精神はどのように継承されているのか。筆者は松村謙三、高碓達之助、岡崎嘉平太、古井喜実、田中角栄、大平正芳の6人を代表的人物に選定し、公開情報を基に、「友好都市」「記念館」「草の根交流」「啓発事業」に分類して整理したのが以下の表である。

まず、友好都市については、松村、岡崎、田中の3人のそれぞれの郷里は、周恩来ゆかりの地と友好関係を締結している。次に交流活動の拠点とも

なり、また「記憶」を継承する場としての記念館については、上記の松村、岡崎、田中に加え、大平、高碓も設置されている。

次に、草の根交流および啓発事業については、松村、高碓、岡崎の郷里が活発であり、とりわけ、松村の郷里・福光が重層的で多様な活動を継続していることが特筆される。既述のように漫画本、紙芝居などの創意工夫は、こうした風土・環境の中で生まれたものに他ならない。他方、管見の限りその他の市町については、公開情報としてはめぼしいものは見当たらなかった。コロナ禍もあり活動が停滞していることが推察される（今後のさらなる調査が必要）。

日中国交正常化に貢献した代表的人物の郷里における日中交流の現状

	友好都市	記念館	草の根交流	啓発事業
松村謙三	富山県福光町（現南砺市）—浙江省紹興市（周恩来の祖籍地）	松村記念会館	南砺市福紹会（前身は福光自治振興会。一般住民による交流） 日中友好教育会（中学生の相互訪問、姉妹校交流） 松村謙三顕彰会（地元議員などによる交流）	漫画本「松村謙三」（中国語版もあり） 紙芝居「けんそはん」（総合学習の副教材として活用）の制作・普及
高碓達之助	大阪府高槻市—江蘇省常州市（高碓との直接の関係なし）	高碓記念館	姉妹校交流 市民親善訪問・周年事業 医療研修生来訪 行政視察訪問団来訪など	高碓達之助に学ぶ会 高槻名誉市民を語り継ぐ会
岡崎嘉平太	岡山県吉備中央町—江蘇省淮安市淮安区（周恩来の出生地）	岡崎嘉平太記念館	中高生の訪問団の相互派遣	岡崎嘉平太記念館の企画展、講演会、写真展、出前講座
古井喜実	鳥取県八頭町—吉林省大安市（古井との直接の関係なし）	—	最近の交流の記録は見当たらない	
田中角栄	新潟県西山町（現柏崎市）—江蘇省淮安市淮安区（周恩来の出生地）	田中角栄記念館	最近の交流の記録は見当たらない	
大平正芳	香川県観音寺市—山東省青島市即墨区（大平との直接の関係なし）	大平正芳記念館	最近の交流の記録は見当たらない	

出所：各種公開資料を基に筆者作成

おわりに

ここまで見てきたように、松村の郷里・福光においては、息の長い「草の根」民間交流が行われてきたことが確認できた。これは、「松村精神」が地元の広範な支持者に深く根付き、また関係者の努力によって継承されてきたことの証左であろう。他方、たとえ「井戸を掘った人」の郷里であっても、常に記憶を想起し意味を与えて忘却に抵抗する共同体の積極的な行為がなければ、時の経過とともにその活動は形骸化することが避けられないのも、また現実である。

本年は、戦後80周年であると同時に、松村が最後に訪中した1970年から55年目の年でもある。この卓越した政治家が残した「無形遺産」とも言える「松村精神」が、多くの人々によって想起され、彼が求めたアジアの平和と発展の道を再び輝かせることを願ってやまない。本稿が松村を再考するきっかけとなれば幸いである。

参考文献

- 遠藤和子『松村謙三』KNB興産出版部、1975年。
- 木村時夫他『松村謙三伝記編』『松村謙三資料編』財団法人櫻田會、1999年。
- 松村謙三『三代回顧録』東洋経済新報社、1964年。
- 松村謙三没後50年記念誌編纂委員会『山高水長―松村謙三と中国』南砺市教育委員会・松村記念会館、2021年。
- 松村謙三資料集編纂委員会『松村謙三資料集1〜4 松村謙三日記』、2023年。
- 『私の履歴書 第二集』日本経済新聞社、1957年。
- 翟新『松村謙三集団和中国』北京・社会科学文献出版社、2007年。
- 筆者略歴（おかだ・みのる）**
- JICA勤務を経て、2014年より拓殖大学国際学部教授。JICAでは3回北京に駐在。主な著書に

『日中関係とODA―対中ODAをめぐる政治外交入門』『対外援助国』中国の創成と変容1949―1964』『ぼくらの村からポリオが消えた―中国・山東省発「科学的現場主義」の国際協力』『日中未来遺産―中国「改革開放」の中の「草の根」日中開発協力の「記憶』『現代中国の腐敗と反腐敗―汚職の諸相と土壌』（共著）などがある。

原稿・写真など大募集

会員の皆様から、原稿・写真などを幅広く募集いたします。

●みんなの写真館

裏表紙（表2）に掲載する写真、図画。いずれも表題を付けてください。また写真については表題だけではなく、300字程度のコメント（解説文）を付けてください。

国内外ツアーのスナップ、思い出のショット、さまざまな記念写真、日常生活のひとこま、家族写真……、テーマは問いません。原稿をメール、または郵送で事務局へお送りください。